

国崎望久太郎著

『近代短歌史研究』

田中順二

故小泉冬三博士編著「明治大正短歌史料大成」三巻の中、「明治歌論資料集成」の一書は子規以前の稀觀に属する重要歌論を收めて

「靈前にささげ」ようとする著者の心裡は「序」にいうごとき「果敢ない」どころのものではないであろう。

いるが、博士はその「解説」に「さて、これらの資料のうへに如何なる歌論歌学史が組立てられるのであらうか、それはもちろん組立てる人々の自由でなければならぬ」といわれた。これは謙虚で公正なことばであつたが、本書の著者は自らも博士の仕事に直接助力をした立場から、その資料博搜の労を認めるとともに、その「序」に「博士はそれに基づいて『近代短歌史』（明治篇）の大著を書かれたが、その文学史的把握には、もちろん多くの異論が予想されるだらう」と、博士の業績の上にさらに力うよい新展開を望もうとして

「さて、近代短歌の眞の意味の史的研究は昨今ようやくその緒にいたばかりといつていゝのではなからうか。なるほどおびただしい作品鑑賞や歌人伝や歌壇史風のものには既に書かれてゐるが、多くは恣意的なものか、圈外的なものか、さもなれば一結社に無意識に拘束されたものであつて、深く展開の真相に踏み入つて、縦横にこれを料理したものは殆どなかつたというのが実状である。本書の著者は常に冷静な史觀による姿勢を崩さず、特に「全近代を巨視的に把握し」つつ文をやつて

究の成果を挙げていられる。收めるところすべて十篇。その中、三編は早く戦前の述作のもの、他の六編は戦後から最近に發表されたもの、そして巻頭の一編は新たに本書のために執筆されたものと思われる。

今は本書掲載順に従つて紹介してみよう。

「近代短歌史の輪郭」は巻頭に當つて、時代区分を試み、新詩社の文学運動、特に晶子の出現を第一開化期、「スバル」の諸歌人に秋水・夕暮を加えた歌人群の時期を第二展開期、赤彦・茂吉・憲吉・千櫻らによつて代表される大正五、六年頃の「アララギ」を第三完成期とし、その前後を含めて、手際よく各時期の特色とその展開の模様を示されている。子規・鉄幹を「星雲のように混沌としたなかから」生じた「二つの核」とし、晶子の出現を「近代個人主義確立の凱歌」とする一面、蕪村の去俗論にならうことによつて、「世俗的現実から高踏したところ」にその危機の伏在を認めるとか、特に赤彦を大きく取り上げ、「赤彦がその鍛錬道によつて切り捨てたところに、近代個人主義の現実的樹立にかかわるさまざまな哀歎があつた」とされるところには示唆に富むものがある。従つ

て、「赤彦・アララギの歌風によつて近代短歌が完成したことは悲劇的であつた」と見、「近代的自我の未確立の状況のうちに、その現実的形成の努力が、政治的社会的分野で十分にかつ効果的になされなかつたとき、近代の一切は頹廢として拒否され、現実への随順の論理が用意された。しかも一応自然主義を経過した人間にとつては、多分に意志的に強制的に、いわば鍛鍊道的になされねばならなかつた。そこに赤彦の近代があり、アララギの現実主義が存在を主張しえた歴史的条件があつた。また、対象を自然と私小説の領域に限定せざるをえなかつた理由もそこにあつた」とされる一項はアララギ批判として考えさせる重要な要素を含んでいる。「近代歌論の成立」の一編は書中もつとも長編の力作で、明治初期の和歌改良論の歴史的論理的展開を當時の広い社会思想の動きの中に具さに跡づけていられる。従来改良論が資料的に断片的に放置されていたかに思われるものを著者はよく一々必然的の発言として整理を試みられた。

『子規をめぐる二・三の問題』において、これまでの子規評価が鉄幹晶子の詩的事

業を貶値することによつて事終わりとしていた態度に不満を示し、又漢詩にその文学的出発を見出していられるが、これは旧子規観の盲点に照明をあてたものといえる。「子規における万葉主義の進展」では子規の写生説を見直し、その写生的態度は画家から学んだのではなく、単に写生という用語を借用したに過ぎず、又その写生説と近代リアリズムとの表裏的一致、および本質的な隔絶はもう一度考察すべき問題だとされる。「近代に於ける歌道観念」においては赤彦歌論を万葉調の復活、写生の提唱、鍛鍊道の主張の三つに要約し、特に鍛鍊道について、当時のアララギと阿部次郎・小宮豊隆・田辺元らとの内部的連絡に留意し、結局赤彦の歌道を一概に反動的、保守的、非近代的のものと規定せず、個人の現実感にのみ真実を見た処に近代の特色を見ようとし、中世的な歌道観念が赤彦を通じてどのような変質を遂げたかを見ておられ。次の「島木赤彦」の一文は巻頭文と照応し、赤彦の現実面への接触の狭少、豊饒な現実に對する不感性を指摘、一世を風靡した赤彦調をもつて桂園派の様相に比しているなど興味がある。このように、本書は赤彦を大き

く考察の俎上に載せているが、斎藤茂吉・高田浪吉・丸山静諸氏による嘗ての論考の偏向をしばしばおのずから訂正している結果となつている。「千櫓の生涯と芸術」は多くの引用歌によつて「社会認識の浅薄」と「獨創性の乏しさと通俗性感傷性」とを美証しておられるが、古くもなされた旧稿であるだけに公式論めいているかと思う。「若山牧水と自然主義的類唐期」は牧水を「明星系に對しては内面化された自我をもつて、自然主義に對しては主情的反撥をもつて自己確立の契機としつつ一時期を形成し始めた」とし、自然主義的類唐派の有力な存在核とみなす。「落伍者の文学」においては、従来の伝説化された啄木觀を正し、「時代遅れの浪漫詩人として自然主義文学運動の形成期に登場」した啄木を落伍者と見、却てそこに切実な心性を魅力として見ようとする。最後の「赤光の編纂に對する疑問」は三十八年作とある「折に觸れ」一連が実は大正二年「赤光」編集時のものではないかというので、この試論は一般に歌集の編纂意識の問題として興味深い。

著者は「諸君は啄木を愛するだらう。真に愛するとは対象の批判的構成にまでいたるこ

とである」といわれるが、この呼びかけは啄木の問題に限らない。著者のこの呼びかけは本書の特色として、どの論考もすべて読者に訴えてくるものが多い。未整理の資料をよく

こなしただ上の発言は著者独自のものとして読みごたえのあるものとなつてはいるが、慫をいえばそれらの資料をもつと丹念に引用することによつて、資料そのものに語らせる方法

を多く採用できなかったものかとも思う。

(昭和三十五年三月刊、国語国文学研究叢書 11、三二〇頁定価六二〇円、桜楓社出版)

鈴木弘道氏著

「平安末期の物語研究」

大 橋 清 秀

鈴木弘道氏著の「平安末期物語の研究」は、

第一篇 夜半の寢覚

第二篇 浜松中納言物語

第三篇 とりかへばや物語

の三篇からなつてゐる。これら三つの平安末期物語研究の執筆順序は、本書に收められてゐる順序とは逆に、とりかへばや物語の研究が最も古いものである。昭和二十五年三月刊平安文学研究第三輯所載の「とりかへばや物語と後代文学『ちごいま』との関係」(本書第三篇第五章第二節)がはじめである

うか。著者はこの年に立命館大学を卒業されている。すでに源氏物語の注釈書を出版してゐられることによつてもあきらかなように、かねてより著者は源氏物語の研究をしたいと思つていられたのであるが、源氏を理解するために、その周辺の作品をきわめることが必要であり、たまたままだ多くの人によつて研究されていない作品を研究することも有意義な仕事ではないかとの後藤丹治博士のすゝめもあつて、卒業論文をとりかへばや物語にきめられたということである。

本書に収録されてゐるとりかへばや物語の

研究は物語の構想、物語に現れた愛情、無名草子に於ける今とりかへばや論、狭衣物語との比較、及び影響作品、外国文学との比較文学研究にわたつてゐる。著者の実証的な真摯な研究態度は本書をたぬいてゐるのであるが、とりかへばや物語の研究に於ては、広く外国文学にまで及び、独自の境地を開拓されてゐるのである。しかし勤務のかたわらの研究は時間的にも制約されざるを得ず、資料面の不如意は容易に解決することが出来ぬと考えられてか、同時代の作品である浜松中納言物語に目を転ぜられたようである。浜松中納言物語と爛柯の故事(本書第二篇第二章)、浜松・とりかへばや所載「させまろ伝説」に関する考察(本書第二篇第三章)などの研究は著者の得意とするところである。

次に夜半の寢覚・浜松中納言物語の成立順